

六花



RIKIWA

3

俳句雑誌りっか

2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん
今

手紙来る

山田六甲

白梅のちらほら香かうのよき手紙
底冷の乾きつつある蹴り轆轤
平坦な地のなし陶すえの郷の梅
梁太き窯場に猪を喰ひにけり
春時雨いつやら雪に曼佗羅華
膝深く喘ぎて雪の男女かな
雪の田に顔を残して去るをとこ
鳶降りて大雪原となりにけり
元伊勢の雪搔く人と目の合ひぬ
軒に干す男の下着雪崩音
水底へ谷深かりき二月尽
春暁の竹ち生く島ぶは形なして来し
幻にあらず湖北に鶴見しは
鯉飼はれ氷らぬ水の寒からむ
鴨喰うて比良八荒の日なりけり
日隠れて竹ち生く島ぶへ雪崩ひびきけり

雪嶺抄 余生 笹村 政子

ななかまど一枝余さず紅葉づれる
涌水に鍔かたむける冬帽子
祀られし水の神へと散紅葉
みざり寄る秘仏に膝の冷えて来し
日向ぼこ影を残して離れけり
路地裏のところどころに冬の空
枯木立テニスコートへ風の抜け
極月や空へト口箱つみ土げて
ふたたびの母見舞ふ日の枯木道
冬木立軽くなりたる余生かな

雪卿集

通夜

永田万年青

お通夜やコートのお止められず
首巻を二重にしたる通夜客
クリスマスひとつ足らずのケーキかな
寒月をよぎりし雲の透けてをり
思案して三年日記買ひにけり

成木責

貝森光洋

成木責かすかに去年の疵残り
えんぶりの田圃に力ふやしつつ
風雪の皺を刻んで鏡餅
寝正月極楽過ぎて地獄かな
魂を失い給いし干し大根

雪卿集

初雪
出口
誠

寒雀羽音はげしく発ちにけり
初雪の積もることなきビルの街
ぽとぽとと音立ててをり冬の雨
成長の記録の残る古日記
寒風がわきの下まで迫りけり

薬喰
佐津のぼる

階段の途中が暗し薬喰
のど飴の袋やりとり日向ぼこ
冬めくや日の射す方へ鯉移り
へこへこの筆をなだめて賀状書く
かと言って湯豆腐だけでは物足らず

日向ぼこ影を残して離れけり

笹村政子

ななかまど一枝余さず紅葉づれる
涌水に鰐かたむける冬帽子
祀られし水の神へと散紅葉
みざり寄る秘仏に膝の冷えて来し
日向ぼこ影を残して離れけり
路地裏のところどころに冬の空
枯木立テニスコートへ風の抜け
極月や空へト口箱つみ土げて
ふたたびの母見舞ふ日の枯木道
冬木立軽くなりたる余生かな

ひなたぼこかげをのこしてはなれけり ささむら まさこ

こんな句、シュール（超現実）で解らんとする人があるかも知れない。

しかしこういう感覚の句を私は採る。

日向ぼこをしている間に、主人公の影は幽体離脱、のように離れていたのだ。

私が「正直すぎる」と注文を付けている政子にもこのような大胆な句を詠めるもののが隠れていたのかと驚いた。少しずつ変貌をとげていく政子が居る。

裸木の晴れ晴れと立ちみたりけり

志方章子

裸木の晴れ晴れと立ちみたりけり

覚え書きほどの日記の果てにけり

一旦は吹き上がりたる散り紅葉

鳥の声上ずつてをり紅葉谷

群れ雀木の葉にあらず降つてきし

はだかぎのはればれとたちいたりけり しかたあきこ

裸木は冬になってすっかり葉をふるい落とした木で枯木の傍題。

それを擬人化し感情移入して詠んだ。晴れ晴れは天候も匂わせる。真冬によく晴れた空へすつくと立つ裸木は、何物も飾らず凛として立っている。無一物、裸一貫という言葉の通り、煩わしいものを一切取り払って、身も心も晴れ晴れとしているよ、と裸木に呼びかけている。そこには自己投影も含んでいよう。簡潔で格調高く切れもいい。章子は一番苦手を敵冬を逆手に取って秀句を生んだ。

雪樹集

まちかど

廣畑 育子

おでん屋の町のサンプル反りぬたる
半間のおでん屋出汁の匂ひして
ポインセチアわづか並べる花屋かな
河豚を買ふべしと坂道くねくねと
数へ日や塩屋市場のひつそりと

鳩

筒井八重子

紅葉散る一の谷園風そよぐ
秋深む池のほとりに散る紅葉
空晴れて風こち良き秋の午後
鳩の群池に紅葉の色映し
ぴらかんさ冬鳥の来て揺らしけり

蛭雪譚

六甲選

*ここで私が言うのは技術論か。

二十七年三月号鑑賞

ラジオである学者の論を聴いた。「蟻はどれもせつせと働いているようであるが、実際は率先して働くのは全体の二割ほど」である、と。そこで、働く蟻だけを集めてみると、全部がはたらくのでなく、やはり懸命に働くのはその中の二割だという。さらにその中から働く蟻を集めても同じ結果が出るという。これは摂理である。宇宙の法則であるから、どうにもならない。だからこの欄を読む人も二割程度だと思うが書く。

ななかまど一枝余さず紅葉つれる

笹村 政子

私は句会で佐津のぼると笹村政子に厳しく当たると。憎くて当たるとではない、弟子とアホ師匠の体当たりなのだ。橋詰沙尋（はしづめさじん・天狼同人）の「豹使い夜は蚊を打つて夫に寄る」ではないが豹やライオン使いのようにいつも油断なく鞭をバシバシ鳴らしていないと喰われてしまう。そのくらい句会や句の話になるとお互いに牙をむき出して闘わないと…。相撲で言えばぶつかり稽古。しかしこの間、Rこう会で「誉めて育てて欲しい人？」と皆に訊いたら「はい」とほとんどの人が手を上げた。「政子

は誉めてもらえる人がいていいね」とご主人様が仰ったとか。誉めたい。佳い句があったときの私は嬉しく楽しくなる。佳い句がないときには不機嫌になる。どこの主宰もそうだと思う。さて、この句ナナカマドが見事に紅葉を尽くした。それに感動して詠んだ句だが。私からしたら「一枝余さず」だけで片付けてしまっただけはナナカマドに申しわけないのかと思う。推敲して見るのもよい。こう書けば政子は解っているから、前向きに取り組む。そういう姿勢が好きだし私の見習うところ。年齢的に「もういいわ」と落ち着きたい頃だが、精神年齢はまだまだ若いから私も思い切り言える。玉三郎が黒柳徹子に言っていた。玉三郎さんはよくなりましたねと言われて「誉めないで下さい」と玉三郎の父がいったという。〈以下略〉



六花集

三月号

平居 潘子

紅葉積む厄除橋を渡りけり
大絵馬に銀杏落葉裏のかぎりなし
谷川の岩に貼りつく紅葉かな
奔流の桜紅葉を巻き込みぬ
からからと鳴つて竹林冬に入る

秋田 典子

行きつけの店の残りしセーター買ふ
芋の子をくつつけたまま売られをり
婦人物防寒履きのはみ出せり
園児持つあやとりの糸短かかり
葱刻む俎板碧く染まりけり

菊谷 潔

夢さめて盧生踏み行く朝の霜
落葉踏む音しんとして山眠る
永遠がひよいと顔出し山眠る
半刻は初雪残る薄日かな
朔旦に冬至重なりなほ寒し

朔旦冬至 十一月一日

延川五十昭

無医村に若き医師来る冬はじめ
たをやかに水仙生ける若女将
敦盛の注し連綱飾る梵字墓
抜刀の静寂を破る寒稽古
丸鬘に稲穂挿したり初詣

大内 幸子

記念樹の背丈はるかに枇杷の花
今日からはひとり部屋に初炬燵
祭壇の笑顔と語り白障子
雪時雨ブル音競ふ川普請
急くことももうおよばずに年用意